

不登校を考える

スクールカウンセラー
NPO法人アンガージュマン・よこすか理事長

滝田 衛

この10数年、NPO法人の居場所で、学校や相談機関の相談室で不登校の子どもと出会っています。何処にでもいる、普通の子供です。初めは寡黙で徐々に多くを語りだす子供です。親御さんの相談に乗る機会もたくさんあります。親御さんは困り果て、子供の姿を嘆き苦しみ、子育ての失敗と悩みます。しかし不登校の課題は、子供の側にはではなく大人たち、社会の側にあると実感しています。

不登校の子供に向けられる大人の言葉は、学校へ行っていない「悪い子」、学校をさぼっている「怠け者」、家にひきこもっている「ダメな子」という子供を蔑む言葉です。ゆえに、親を批判し、子供を引っ張り出そうとする指導や行動が家庭と学校を行き来します。さらには「発達障害」「精神科の治療」「薬を飲んで」等の分析で学校から遮断し、“障害”“病気”の枠組みにはめ込もうと、子供たちを追いこむ大人の問題も加速しています。

もちろん専門家の診断や治療を十分理解した上ですが。

そこで自戒を含め不登校を問い直します。子供一人ひとりには、取り巻く家庭や学校の状況が存在します。頑張りすぎ、息切れする子供がいます。友人との付き合いに不信を抱き混乱する子供がいます。勉強がむずかしく教室で苦戦している子供がいます。親や先生の期待に応えすぎて疲れきっている子供がいま

す。でも、子供は「疲れた」「困った」「どうしたらいい?」「休みたい」との声を上げません。それは「弱い子」「サボっている子」「生きる意味のない子」だと、親や社会から教えられているからです。その結果、子供は頭痛や腹痛を訴え一人で抱え苦しみ家にひきこもります。相談せずに、一人で解決しようとしています。この社会の価値観である、“自己責任”を強く背負うのです。

残念ながら学校や社会は“みんな”で生きる力から、“一人”で生きる力を「自立」と読み換える社会にしまいました。しかし、一人では、自己責任では不登校は解決できません。そこにあるのは絶望です。親や教師は子供を叱咤激励して追い込むことを止めることです。みんなと生き社会の中で解決し、親や教師に夢や希望を感じることです。

今、苦戦している子供に寄り添う、大人の“共感する”力が子供には必要です。“共感”とは“つながる”ことです。「親や教師はここにいる」との“つながる”家庭や学校づくりが大切です。子供への誤解を解き、不登校を排除せず、家庭や地域や社会に迎え入れる“つながる”環境を、遅ればせながら大人が作りましょう。